

二宮隆洋さんのこと

小澤 実

二〇一二年四月一五日、ひとりの編集者が世を去った。二宮隆洋さんである。彼の旧友たちの末席にくわえてもらい、四月一日に横浜市の病院を見舞ったのが言葉を交わす最後の機会となった。そのときの二宮さんは、やつれてはいたが頭は明晰で、「よう」と挨拶をくれたあとは、読んで印象に残った本やいま読むべき新しい書き手についてみずから語り、そしてその場に居合わせた皆に意見を求めている。

西洋精神史に関心を持つものであれば、おそらくどこかで二宮隆洋という名前と出会っているはずである。彼は一九五一年七月に愛媛県に生まれ、県立宇和島高等学校から京都大学法学部を経て、一九七六年に平凡社に入社した。そして一九九九年、定年を待つことなくフリーの編集者となり、なお慶應義塾大学出版会や中央公論新社などで多くの作品に携わった。彼の名前は知らなくとも、彼の手がけた作品群になんらかのかたちでお世話になっていないものは皆無ではないか。平凡社時代には『イメージの博物誌』、『平凡社百科事典』、『西洋思想大事典』、『エラノス叢書』、『キリスト教神秘思想史』、『中世思想原典集成』、『ヴァールブルク・コレクション』といった大部のシリーズやカントーロヴィチ『王の二つの身体』またディーバス『近代錬金術の歴史』などを手がけ、平凡社を出たのちにも、慶應義塾大学出版会では『ブリテン諸島の歴史』そしてP・ブラウンや井筒俊彦関連の書物を、中央公論新社で

二宮隆洋さんのこと（小澤）

は『哲学の歴史』やカント・ロヴィチ『皇帝フリードリヒ二世』などにかかわった。彼が企画し、著者や訳者を決め、提出された原稿に朱をいれ、ゲラを校閲した合計頁数がどの程度になるのだろうか。編むだけにとどまらず、親友の英文学者とともに、傾倒していたヴァールブルクの知の体現者フランシス・イエイツにかかわる二冊の翻訳も世に問う。M・G・ジョーンズ『フランス・イエイツとヘルメスの伝統』（作品社、二〇一〇年）とフランシス・イエイツ『ジョン・フロリーオ』（中央公論新社、二〇一二年）である。前者は、渡辺一民の『林達夫とその時代』を彷彿とさせるイエイツの知的伝記、後者は、『ゾルダノ・ブルーノとヘルメス教の伝統』（前野佳彦訳、工作舎、二〇一〇年）や『記憶術』（玉泉八洲男監訳、水声社、一九九三年）で精神史の裾野を広げたイエイツのデビュー作である。

二宮さんの仕事のおかげで、日本の人文学とりわけ西洋学の底は一挙に引き上げられたといつてよい。一二世紀人シャルトルのベルナルドゥスが喩えるように、巨人の肩の上に乗ることで次の高みを見据え、そこへの登攀を繰り返すことが学問の営みであるとするならば、西洋学の全体像を伝える翻訳を次々と実現させた二宮さんの仕事はすべての西洋学者がまずは出発点としておかねばならない標高を設定したといえる。西洋学だけではない。日本学や東洋学として、そもそも学問という営みの根底には西洋発の操作概念が抜きがたく存在し、そうした操作概念の吸収やそれとの対決を通じて今の姿があることを思い起こすに、日本における学問それ自体の進展に二宮さんは多大なる貢献をしたのではないか。編集者は黒衣に徹すべきというのが彼の持論であったが、その編集者がいなければ学者の成果は世に出ない。良き本はかならず良き編集者が随伴している。

二宮隆洋さんからはじめて連絡をいただいたのは二〇〇九年のことである。わたしがあるところに

書いた文章が目にとまって、とのことであつた。最初は共通の友人を介して渋谷で食事をした。その後、公式の場で顔を合わせることもあつたし、約束してふたりで会うこともあつた。彼は学界や出版業界に對する憂いを語ることも多かつたが、その憂いと同じくらい、今後自分が手がけたい仕事の構想についても熱意を込めて語り倒していた。酒は呑まなかつたが、知識に對して貪欲で饒舌であつた。

二宮さんの知識は百字連環というにふさわしかつた。ただ博識と言うだけではなく、知識の連鎖にこれこれと思いをめぐらせることを好んでいた。次から次へと人名や書名があふれ出る様は、『西洋思想大事典』や『中世思想原典集成』の索引巻（大部の著作を使えるようにするために二宮さんは索引の充実に心血を注いだ）を前にしているような気分であつた。膨大な西洋知の活字化を後押しした二宮さんだが、そのなかでも好みの傾向はあつた。オカルティズムや神秘主義思想である。すでに人類の共有財産となつているアリストテレス、ルソー、カントといった表舞台の登場人物よりも、かつての思想史ではキワモノとして捨象されてきたヘルメス思想、魔術、錬金術、民族主義思想などを掘り起こすことに熱心であつた。別に彼自身にオカルト氣質があつたわけではなく、西洋精神史を正しく理解するのであれば、現代の価値観からさかのぼつて「正統」とされる思想を特権的に称揚するのではなく、古代末期、中世盛期、ルネサンス、ナチズム期などといったそれぞれの時代と地域において人々の心を捉えた思想をそのコンテクストのなかで理解すべきだとする、至極まっとうな歴史学的態度のあらわれであつた。『哲学の歴史』完結に際して」と題した文章で二宮さんは、「大きなコンテクストをつかむには、時系列を追うにしくはない。…散漫・恣意に陥りがちな「主題別」編集に比べれば、「歴史／物語」は安定した理解の準拠枠となりうる」と記している。そのうえで「コンテクストへの無知を棚に上げて、神経症的にテクストに拘泥する風儀」に警鐘を鳴らし、「大きくしかも精緻な総合」をこそ目指すべきと持論を結ぶ（「本」のメルマガvol.322.5、二〇〇八年五月三〇日）。くわえて言えば、彼の選書は「大き

二宮隆洋さんのこと（小澤）

くしかも精緻な総合」であるなかに、文体と議論が匂いたたせる色気を忘れることはなかった。

そんな一連の二宮作品の相当数がわたしの書架に並んでいる。その全貌は、二宮さんの長年の友人の手になる『親愛なる密儀 編集者二宮隆洋の仕事 一九七七一—二〇一二』で確認することができるが、彼特有の美しい装丁と組版をもつ分厚い紙塊は、思想史を専攻しないわたしにとっても一つの財産である。くわえてわたしの手元には彼の蔵書から形見分けしてもらった三冊の書物もある。カステイリオオーネ『宮廷人』（東海大学出版会、一九八七年）、松原國師『西洋古典学事典』（京都大学学術出版会、二〇一〇年）、Wouter J. Hanegraaff ed., *Dictionary of Gnosis and Western Esotericism* (Leiden: E.J.Brill 2006) である。最後の英文事典は翻訳企画を練っていたように、「モデル原稿」とタイプされた「チェスターのロバート」の項目の翻訳案が挟まれていた。この事典の完訳が実現していれば、ある意味、二宮さんが深く関心を寄せた「もうひとつの西洋精神史」の決定版となっていたかもしれない。

二宮さんは、くだらない「論文」を量産するくらいなら、長年参照することのできる基本書の翻訳を推奨した。これと見込んだ訳者であれば一〇年でも二〇年でも訳文の提出を待った。その一方で世界のアカデミアに還元することのできるオリジナリティのある西洋研究が日本人の手で生み出されることも切望していた。そして実際のところ、彼が設定した標高から足を踏み出し、世界の檜舞台で学問の刷新に貢献する日本人学者も増えてきた。二宮さんがもし生きていたならば、古典や良書の翻訳を継続して世に問うだけでなく、こうした新しい世代をひとつにまとめて途方もない企画を立てていたかもしれない。彼の書物の愛読者としてそれを惜しむとともに、二宮さんが面白いねと言ってくれる研究を世に問うことが、彼の遺産を継承したわたしたちがこれからなすべきことなのだろうと思う。

（本学文学部准教授）